大阪市立大学

大学教育だより

RDHE 2016.3 No.13
Center for Research and Development of Higher Education

ロゴデザイン：吉谷ひかり

大阪市立大学
大学教育研究センター
〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
（全学共通教育棟5階）
http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/

これまでの記事は http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/publications/index.html から読めます

大学教育だより No.13

Voice～学生の声 ● 理学部・理学研究科と創造都市研究科の学生・留学生交流 & 意見交換会
Campus Inquiry ● ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！ 文学部・文学研究科／工学部・工学研究科／生活科学部・生活科学研究科
OCU Education News ● 市大教育ニュース！ 副専攻制度／English Café
Center Now & Human ● 大学教育研究センターの活動・研究・スタッフ紹介

アン　ロゾ（Un roseau）No.17：縦書き部分

● 橋本 文彦 先生（経済学研究科・教務担当部長）　● 三船 直子 先生（生活科学部・生活科学研究科）

Voice　～学生の声

理学部・理学研究科と創造都市研究科の学生・留学生交流＆意見交換会

理学部・理学研究科と創造都市研究科の教員・学生有志は、猛暑の中の2015年8月7日に学術情報総合センター9階に集まり、お互いの普段の学生生活や日々の学び方、専門とする学問分野の相違点・類似点や将来の進路などについて、幅の広い内容の意見交換会を行いました。

創造都市研究科後期博士課程学生2名、都市情報学専攻修士学生1名（ベトナム、インド、中国からの留学生）が、それぞれの母国についてスライドを用いて紹介した後に、現在専門的に研究している分野である「空間情報学」について、それぞれの研究テーマに沿って簡単に解説してくれました。理学研究科からは、数物系専攻博士課程学生2名、同修士課程学生2名、理学部数学科4回生3名が参加して、日々の学生生活・研究生活の様子や将来への希望について語ってくれました。

創造都市研究科は学部を持たない大学院だけの部局で、所属する大学院生の大半は社会人や海外からの留学生です。今回の意見交換会は彼らにとって所属の異なる若い大学院生・学部学生たちと接する良い機会でした。理学部・理学研究科からの参加学生たちにとっても、少し年長の留学生たちと接してお互いの意見を交換できる貴重な機会となりました。

理学研究科の高橋が司会役を務め、ほかに創造都市研究科の米澤剛先生、吉田大介先生、大学教育研究センターの飯吉弘子先生が参加され、学生の発言を促して頂きました。

Voice ～学生の声

理学部・理学研究科と創造都市研究科の学生・留学生交流＆意見交換会

【創：米澤】今回の交流会には創造都市研究科後期博士課程学生2名、都市情報学専攻修士学生1名の計3名の留学生が交流会に参加しています。私自身は理学部地球学科出身で、研究内容は地球科学や地理学に近く、理学部・理学研究科の学生の方たちにもなじみが深いと思います。

【理：高橋（司会）】理学研究科からは数物系専攻大学院生と数学科学部4回生が参加しています。
まず、留学生の方たちから簡単に自己紹介して頂けますか？

各国の様子とそれぞれの研究について

【創：院生Ａ】私はインドから来ました。今はリモートセンシング技術を用いて海洋学の研究をしています。海岸侵食などが解決すべき大きな問題です。インドでは州立大学や私立大学など5種類の大学があります。一つの大学に多くのカレッジがあって、少し日本と違います。大学の体育の授業ではカバディをやりました。ローカルな言語は1000くらいあって、公用語は英語など30くらいです。

【創：院生Ｂ】私は中国東北部から来ました。冬はとても寒いので鍋や焼き肉が冬の定番料理です。現地の情報系の大学を卒業して、日本に来てから語学学校に通いました。そのあと一年ほど営業関係の仕事をしてから市大の大学院に入りました。今は、地理情報システム（ＧＩＳ）を用いた Precision Agriculture の方法で、中国の農業問題を解決したいと思って研究しています。

【創：院生Ｃ】ベトナムから来ました。ベトナムでは大学に勤務していました。私のホームタウンは美しいビーチのあるところです。昨年、現地で日本－ベトナム地理情報学会が開かれて、市大からも理学部地球学科の先生たちが参加されました。私はベトナムの教育大学を卒業したので、日本の教育システムに関心があります。

【飯吉】理学部での「数学の研究」はどのようなことをするのですか？

【理：院生Ｄ】数学の研究は、最初はすでにある論文を自分なりに解釈していく作業になります。そこから何か新しいことが発見できれば研究成果になります。

大学での教員養成教育の違い

【司会】理学部からは学校の先生になる学生が多いですよ。教員になるのは難しいですか？

【理：学生Ｅ】大阪では教員採用試験の合格率は30％くらいで、1次試験を通った後、2次試験があります。教育実習にも行きます。

【創：院生Ａ】インドでは高校の先生になるには3か月程度の教育実習を受けます。

【司会】理学部の学生は卒業後何になろうと思って理学部に入学したんですか？

【理：学生Ｅ】やっぱり学校の先生ですね。僕は数学の先生になるつもりです。

【理：院生Ｆ】理学部には理科選択コースがあるけど、入学の際は選択肢として考えなかったです。僕も教育実習は3週間行きましたけど、とても楽しかったです。

【理：学生Ｇ】私は今4回生で、将来は中学校の先生になりたいです。ずっと教員志望でした。今は塾講師などのアルバイトのほかに登校拒否の生徒たちと過ごすフリースクールで活動しています。

【理：院生Ｈ】私も最初は教員志望でしたが、教育実習に行って自分には合わないと思ってやめました。

海外での学会参加や英語による学習、留学希望など

【理：院生Ｈ】大学院に入学してから海外への研究出張に何度か行っています。初めての海外出張は2年前の国立台湾大学訪問でした。海外で初めて英語で講演しました。

【理：院生Ｄ】昨年の夏はスペインのマドリッドで行われた大規模国際研究集会に研究室で参加しました。

【司会】彼らは後期博士課程の学生なので、研究者の卵として海外での研究セミナーに参加する機会が多いです。

【理：院生Ｆ】理学研究科の修士1年です。日頃のセミナーでは、英語で書かれたテキストを輪講しています。なかなか読み進めるのが大変で、今は修行中です。今年の7月に本学で行われた「日韓大学院学生数学ワークショップ」に参加して初めて英語講演をしました。講演用の TeX Beamer というアプリがあるのですが、最初は1ページ作るのに丸1日かかりました。

【創：米澤】理学研究科の博士課程の皆さんは海外留学をしたいですか？

【理：院生Ｈ】将来的には海外に武者修行に行きたいですが、今はここでしっかり勉強して海外研究者とディスカッションができるだけの実力を身につけたいです。

【飯吉】4回生の方たちはどうですか？
【理：学生Ｇ】まだあまり考えたことがないです。

■ 各国の学費制度の違い

【理：学生Ｉ】一応、大学院進学志望です。学費の面で他大学の院は考えなかったです。

【創：院生Ｃ】ベトナムでは教育大学の学費は国が全部出します。
【創：院生Ａ】インドでも高校までの学費は不要です。大学の学費を出してもらえるかは成績によります。
【創：院生Ｂ】中国での状況は日本と似ています。大学の学費は高いです。アルバイトもしていました。日本のように塾教師などではなく、主に肉体労働でした。
【創：院生Ｃ】ベトナムでは在学中に1～2か月程度のミリタリーサービスがあるので大変でした。私も義務として行きました。

■ 日本での研究事情や専門分野選択

【司会】より高い学位取得を目指すのに日本は良い国でしたか？
【創：院生Ｃ】はい、とても良かったです。
【飯吉】創造都市の学生の皆さんは、今の専門分野をいつ決めたんですか？
【創：院生Ｃ】博士課程に入学する前、学部の時から地理学を勉強していて、修士の時にＧＩＳの学会に出席して面白いと思ったからです。
【創：院生Ｂ】私は中国では情報処理関係一般を勉強していました。
【司会】なぜ大阪に来ることにしたのですか？
【創：院生Ａ】やはり（創造都市研究科教授の）ラガワン先生の存在が大きかったです。
【創：吉田】インドの工科大学からは、インターンシップの問い合わせが多いです。

■ 大学院進学やその後のキャリアについて

【創：院生Ｃ】ベトナムでは博士課程に進学する人は何年か働いてからの人が多いので、普通、26歳以上くらいからは博士課程に入学します。今日の理学研究科の皆さんはとても若いです。
【創：院生Ａ】インドでも同じで、まずＲＡ（リサーチアシスタント）などになってから、その後に進学します。
【司会】日本では、博士号取得者が一般の民間企業に入る例が大変少ないですね。
【飯吉】今、大学教育研究センターも協力して、ポストドクターのキャリア開発支援プログラムに関わっていますが、そういった現状を少しでも改善できれば、と考えています。
【司会】博士号取得後はどのようにする予定ですか？
【創：院生Ａ】ＰＤをしばらくやった後、インドに帰りたいです。
【創：院生Ｂ】自分のスタジオを作りたいです。
【理：学生Ｅ】日本では4回生で起業を考える人は少ないですね。すごいと思います。

～交流・意見交換会を終えて～

【理：学生Ｅ】将来、研究者になる人たちと話せてよかった。
【理：院生Ｄ】海外から覚悟をもって日本に来ている方たちと会えて良かったです。

【理：学生Ｇ】私は色々な人と会えると思って、教育大学ではなく総合大学の大阪市立大学を選んだから、今日のような交流会はとても良かったです。
【理：学生Ｉ】今後もこのような機会があればよいと思いました。
【理：院生Ｊ】あまり話せなかったけれど、創造都市の学生の方たちの「母国のために尽くしたい」という研究姿勢は新鮮でした。
【創：院生Ａ】いつもは大学と宿舎を往復するだけのとても狭い範囲で生活しているから、異なる人たちと出会えてよかった。
【創：院生Ｂ】良い経験になりました。

［参加教員の感想］

今は教員が留学生たちの日本での生活をサポートしているが、今回の交流会を契機にして理学部・理学研究科の学生たちが留学生たちの手助けをしてくれたらとても良いことだと思う。今後もより交流を深めてほしい。

（創造都市研究科　吉田 大介）

今回参加した創造都市研究科の留学生が所属するわれわれの研究室では、空間情報学を専門としているが微積や統計、離散数学といった数学の基礎知識を必要としている。数学を専門としている今回の理学部・理学研究科の学生さんとは研究における共通点も多いと思う。今回の交換会を機に両学部・研究科の学生の交流がさらに活発になればと願う。

（創造都市研究科　米澤　剛）

今回の交流会では英語と日本語が半々程度に使われて、理学部学生にとってはとても新鮮だったと思います。理学研究科・創造都市研究科の院生たちの海外経験・留学経験を間近で聞き、大阪市立大学の豊かな国際性を改めて実感することができました。

（理学研究科　高橋　太）

（文責）大学教育研究センター兼任研究員　大学院理学研究科・教授・高橋 太

これまでの記事は http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/publications/index.html から読めます

Campus Inquiry

ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！

文学部・文学研究科

文学部・文学研究科教育促進支援機構

「大阪市立大学文学部・文学研究科教育促進支援機構」は、文学部50周年記念事業の一環として2003年2月10日に発足しました。これは、学生（学部生＋大学院生）の「学び」を支援するために、教職員と学生が協同で運営する全国的にみても非常にユニークな組織です。教育促進支援機構は、学生の教育、研究、進路を支援するために、４つのチームを組み、学生自身による企画立案、実施という原則に基づいて運営されています。

４つのチーム

教育支援：教育支援チームでは、主に二つの企画が区別されます。一つは、「新入生歓迎キャンプ」、「春の市大授業」、「オープンキャンパス」（『文学部案内冊子』の作成も担当します）など文学研究科の公式行事と連携し、学生目線からなされる企画です。他の一つは、支援機構が独自に企画するもので、「履修相談」、「先輩学生によるコースガイダンス」、「Office　講習会」など、大学生活の教育の基本的部分を支援します。また留学相談などもおこなっています。

研究支援：研究支援は、学部生および大学院生の自主的な知的活動・研究活動の支援を目的としています。具体的には、研究会、勉強会への助成、学部生対象としては「卒業論文・セミナー」や「レポート・セミナー」、「優秀卒論賞」、大学院生対象としては専攻を超えた院生の研究報告の場「院生研究フォーラム」や、交流促進をめざす「文学部カフェ」のオーガナイズ、「書評賞」、「優秀修論賞」の企画・審査をおこなっています。

進路支援：進路支援事業では、毎週「メールマガジン」を配信し、就職・進学をめざす学部生・院生に役立つ情報を提供したり、学部生向けの「進路支援セミナー」、「内定者報告会」などを開催したりしています。今年は、初の試みとして「インターンシップ・ガイダンス」を開催しました。

編　　集：編集チームは、教育促進支援機構の機関誌『フォーラム人文学』（年１回刊行）の編集作業をおこないます。支援機構の各チームの活動報告、優秀卒論・優秀修論の要旨、コース紹介、さらには文学研究科の教員へのインタビューなどを掲載し、すでに12巻までを発行してきています。

この他にも、公式サイトの作成・更新、メーリング・リストの活用など、内外の広報活動などもおこなっています。

学生のイニシアティヴという理念に基づいた、教職員と学生の協同による、教育・研究・進路への支援 ── 教育促進支援機構の試みは、他に例をみない試みといっていいでしょう。

文学部・文学研究科教育促進機構長
文学研究科　教授　進藤　雄三

2015年度　オープンキャンパス企画

学部研究科 教育・FD 紹介

Campus Inquiry

ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！

工学部・工学研究科

工学部における数学入門

工学部には，前期と後期の個別学力試験に合格して入学する学生の他に，推薦入試によって入学する少数名の学生が在籍しています。推薦入試制度は専門技術の基礎力を身につけた工業高校などの職業系専門学校の生徒を対象としており，毎年各学科で１名程度の学生が入学します。さらに指定校制推薦入試制度を導入している学科もあり多様な修学経験を有しております。このような推薦入試では所属校での成績優秀者が受験するのですが，工学部での試験は小論文と口述試験のみであり，学力を直接問うような試験は課されません。このような制度で入学する学生は概してまじめに学業に取り組み，一般入学の学生以上の成績を残す者もおります。最近では，在学中に高校生向けの専門教科書を執筆し，それが文部科学省検定に合格した学生もおります。しかしながら一方で，数学などの学習時間が十分ではなかったために，専門科目や基礎教育科目の講義にうまく対応できず留年する者もいました。

このような状況を改善するために，推薦入試制度で入学した学生を基礎学力向上の面からサポートするための「数学入門」を工学部では開講しています。数学入門には履修単位が付与されず，課外の補講のような扱いとなっています。推薦入試で入学した学生はこの数学入門が必修というわけではなく，事前に受講を希望した者のみが参加します。また，本年度は私費外国人留学生や特に希望した一般入試の学生も参加できるとしています。

数学入門の講義は，前期に２２回（週に２回），後期に７回実施されます。開講時間は，他の講義も考慮し，６時限目に設定されています。この数学入門は教員１名が担当しますが，実際の授業は受講生と年齢が近い大学院生のＴＡに担当していただいています。ＴＡは１つの講義につき２名の体制で臨んでおり，受講生の状況に応じて個別で指導したり，交代で板書したりするような形で講義を進めてもらっています。

工学部の専門科目や基礎教育科目の「解析」，「線形代数」，「基礎物理学」などの受講においては，高校での数学Ⅲや旧数学Ｃでの学習内容のきちんとした事前の理解が望まれるものがあります。したがって，数学入門の前半の講義ではまず，高校での学習範囲である数学Ⅲや旧数学Ｃの内容を中心に，関数，行列、逆行列、極限、微分，一次変換，積分（定積分，不定積分，部分積分）などを学習します。授業では例えば，開始時に問題を出題し受講生に解答してもらい，分からなかった問題については板書などにより詳しく解説するような方法で進めております。後半では，大学での基礎教育科目である解析や線形代数での学習内容に対する補足的な演習を行います。

数学入門に対する受講者の感想では，「ＴＡの方々が親切に教えてくださりました。」，「とても役立ちました。」や「後輩たちにもこの補講は絶対に勧めます。」のような肯定的なものが多くあり，基礎数学力の向上に対して一定の効果があると期待しております。一方，他の大学科目の進度との対応に関するような意見もありますので，今後も内容のさらなる改善をはかることで受講生の理解度の向上を目指します。

大学教育研究センター兼任研究員　工学研究科　教授　兼子　佳久

学部研究科 教育・FD 紹介

これまでの記事は http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/publications/index.html から読めます

Campus Inquiry

ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！

生活科学部・生活科学研究科

JABEE認定に伴う、教育・FDの取り組み

昨年、JABEE認定審査（継続）を受けました

JABEE（日本技術者教育認定機構）について、聞き慣れない方もおられるかもしれません。JABEEとは、工農理系学科で行われている教育の認定を通じて国際的に通用する技術者の育成を支援することを目的とした、教育プログラムの認定機構です。1999年に設立されていますが、生活科学部居住環境学科は、いち早く2004年度より認定を受けてきました。そして昨年10月に、3回目の認定審査を終えたところです（正式な結果通知は年明けになります）。

JABEE審査を受けるにあたっては、基準に沿った教育プログラムの実施、点検活動について、膨大な書類にエビデンスを付けて報告します。その作業は大変ではありますが、普段の教育・FD活動を見直し整える機会になりました。本学科の教育・FD活動の最近の新たな取り組みについて、ご紹介させていただきます。

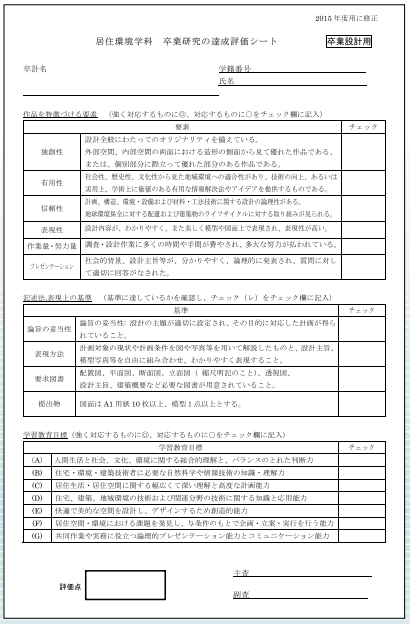
学習進捗確認シート

JABEE審査では、学習・教育到達目標の達成状況を確認しているかが問われますが、学生にも自分自身の達成状況を継続的に点検させることが求められます。そこで、学習進捗確認シートを作成し、年度末に学生に記入してもらうことにしました。このシートでは、本プログラムが設定した学習教育到達目標、すなわち、基礎的素養（一般教養・専門基礎）、専門能力（計画企画力・構造設備等の技術力）、実践力（探求力、コミュニケーション力）を示し、将来の仕事や進路に照らして、どれにどれくらい力を入れたいかの目標設定をしてもらい、項目ごとの今年度の自己評価（5段階評価）とともに、達成できたものと今後の課題について記入するものとなっています。これにより、なんとなく4年間が流れてしまうことなく、学生が1年ごとに「できたこと・できなかったこと」を確認し、初心にかえって学習目標を定める一助になるのではと思います。また教員も、このシートを見れば、学生一人一人の状況を確認することができます。

合同ゼミと卒業研究の達成評価シート

本学科では、これまで3年生後期よりゼミ配属し、ゼミ配属後は各指導教員の責任の下、卒業研究を進め評価をしてきました。しかしJABEEでは、定められた評価方法と評価基準に従って達成度が評価されているかが問われ、教員個人任せは認められません。そこで、ゼミ配属は4年生からとし、その代わりに3～4ゼミをグループにして合同ゼミを組織し、複数教員の指導体制を担保することにしました。合同ゼミごとに年4回程度のゼミと卒論の中間発表会を開催しますが、これには後輩の3年生も参加し、ゼミ学生にとってはいつものゼミより少し緊張して研究を進めるステップにもなり、またいろいろな専門の先生から指導を受けるよい機会になっています。

また卒業研究の評価も共通の基準にもとづいて行う必要があるため、卒業研究の達成評価シート（図）を作成し、これら項目に従って評価し、主査と副査が合意のもと、最終評価点を記入するようにしました。このシートにより、学生にとっても卒業研究の評価基準が明確になり、研究に求められる水準を自覚するのに役立っているものと思われます。



2015年度用に修正

居住環境学科　卒業研究の達成評価シート　卒業設計用

卒計名

学籍番号
氏名

作品を特徴づける要素　（強く対応するものに◎、対応するものに○をチェック欄に記入）

要素		チェック
独創性	設計全般にわたってのオリジナリティを備えている。 外部空間、内部空間の両面における造形の側面から見て優れた作品である。 または、個別部分に際立って優れた部分のある作品である。	
有用性	社会性、歴史性、文化性から見た地域環境への適合性があり、技術の向上、あるいは実用上、学術上に価値のある有用な情報解決法やアイデアを提供するものである。	
信頼性	計画、構造、機能・設備および材料・工法技術に関する設計の論理性がある。 地球環境負荷に対する配慮および廃棄物のライフサイクルに対する取り組みが見られる。	
表現性	設計内容が、わかりやすく、また美しく模型や図面上で表現され、表現性が高い。	
作業量・努力量	調査・設計作業に多くの時間や手間が費やされ、多大な努力が払われている。	
プレゼンテーション	社会的背景、設計主旨等が、分かりやすく、論理的に発表され、質問に対して適切に回答がなされた。	

記述法・表現上の基準　（基準に達しているかを確認し、チェック（レ）をチェック欄に記入）

基準		チェック
論旨の妥当性	論旨の妥当性：設計の主題が適切に設定され、その目的に対応した計画が得られていること。	
表現方法	計画対象の現状や計画条件を図や写真等を用いて解説したものと、設計主旨、模型写真等を自由に組み合わせ、わかりやすく表現すること。	
要求図書	配置図、平面図、断面図、立面図（縮尺明記のこと）、透視図、設計主旨、建築概要など必要な図書が用意されていること。	
提出物	図面はA1用紙10枚以上、模型1点以上とする。	

学習教育目標（強く対応するものに◎、対応するものに○をチェック欄に記入）

学習教育目標		チェック
(A)	人間生活と社会、文化、環境に関する総合的理解と、バランスのとれた判断力	
(B)	住宅・環境・建築技術者に必要な自然科学や情報技術の知識・理解力	
(C)	居住生活・居住空間に関する幅広くて深い理解と高度な計画能力	
(D)	住宅、建築、地域環境の技術および関連分野の技術に関する知識と応用能力	
(E)	快適で美的な空間を設計し、デザインするため創造的能力	
(F)	居住空間・環境における課題を発見し、与条件のもとで企画・立案・実行を行う能力	
(G)	共同作業や実務に役立つ論理的プレゼンテーション能力とコミュニケーション能力	

評価点

主査
副査

PDCAサイクル推進シート

その他、本学科では、ピア評価、独自の授業評価アンケート、全学年が設計作品の発表を行う居住環境デザインフォーラムの開催等、従来から行っているものも含め、様々な教育・FD活動を行っています。JABEE申請にともない、新しく試みた事項をきちんと振り返り、持続的に改善するため、PDCAサイクル推進シートを作成することにしました。半年ごとに、このシートにもとづき学科会議で点検し、改善につなげるようにしたところ、やりっぱなしになりがちだった様々な取り組みの効果を学科全体で確認でき、情報を共有できるようになったことは大きな成果でした。

第12回・居住環境デザインフォーラム：展示室

学生の作品発表

生活科学研究科　教授　小伊藤　亜希子

学部研究科 教育・FD 紹介

大阪市立大学　副専攻制度

大阪市立大学は、2015（平成27）年度より、主専攻（それぞれの学部・学科で修める単位）に加えて、さらに広く、深く、自発的な学修をすすめたいと考える学部生を対象に、ふたつの副専攻を設立しています。①学習余力と意欲と能力があり、②主専攻と副専攻を両立でき、③各副専攻が求める要件を満たす、の３つを備えた人であれば、学部を問わず履修することができます。

詳しくは、入学手続き書類に同封されている「副専攻ガイド」をご覧ください。

GC（Global Communication）副専攻

●目的　：不確実な社会で生き抜くことのできる語学運用基礎能力とグローバルマインドを涵養する
●キー演習　：GC総合演習1・2・3※1年次後期～2年次開講
●キー海外研修：GC_Int（GC副専攻専用カナダ・ビクトリア大学語学研修）
※1年次後期、学年末実施
※成績優秀者・語学運用能力上位者には研修費支援制度あり

2016（平成28）年度の正式登録者募集は7月です。2016（平成28）年度入学の1回生のみGC副専攻に登録できます。希望者多数の場合は、各種語学力テストのスコアに基づいて選抜が行われます。

登録希望者向けガイダンス日程については、全学ポータルサイトおよびチラシにてご案内します。関心のある方は、入学後から語学（特に英語）のスキルをバランスよく伸ばし、副専攻の登録・履修に備えましょう。

CR（Community Regeneration）副専攻

●目的　：大阪を拠点として、変化し続ける地域・社会の問題を解決するとともに、その発展に貢献できる人材を養成する
●キー演習１：地域実践演習（GATSUN）※1・2年次向け
●キー演習２：アゴラセミナーIa／Ib／II ※2年次以降向け

2016（平成28）年度の地域実践演習履修希望者向けの説明会が開催される予定です。CR副専攻への登録には地域実践演習の受講が必須要件ですので、希望者は説明会に必ず参加してください。説明会の日程については、全学ポータルサイトおよび市大COC事業サイト（https://www.connect.osaka-cu.ac.jp/coc/）にて事前にご案内します。

関心のある方は、全学共通科目の中から大阪・地域にかかわる科目を積極的に学び、副専攻の登録・履修に備えましょう。

English Café

➡グローバルビレッジ（全学共通教育棟1階）に移転します。

English Caféは、英語の自学自習に使えるPCが設置されているほか、英語の新聞や雑誌などが置かれており、Café内で自由に使用可能。
英語を学びたい学生であれば、だれでも自由に利用できます。

Leigh 先生

Jacobs 先生

Chen 先生

English Café Talk

English Caféでは、ネイティブの先生と自由におしゃべりをして英語の力をつけるEnglish Café Talkという時間を設けています。月曜、水曜、木曜の午後４時30分から１時間、ネイティブの先生がみなさんを待っています。
なにを話すのも自由。楽しい時間を過ごしましょう。

English Café Talk Special

通常のEnglish Café Talkでは、担当の先生は１人ですが、年に４回、開催予定のEnglish Café Talk Specialでは、担当の先生３人が全員集合。ちょっとしたお菓子や飲み物なども用意されています。
第1回は4月18日(月)に第1回Café Talk Specialを開催予定!

（画像はChristmas Café Talkの様子）

（Café Talkの内容は変更になる可能性があります）

ALC NetAcademy2

English Caféでも自宅でもNetAcademy2が利用できます。
NetAcademy2は、初心者から上級者まで幅広いレベルに対応したネットワーク型英語自主学習教材です。

ALC NetAcademy2スーパースタンダードコースの概要は以下のサイトにアクセスしてください。
☞ http://www.alc-education.co.jp/academic/net/course-e/super-html?aid=course

Center Now & Human

大学教育研究センターは「こんなこと」に「こんなメンバー」で取り組んでいます!

FD（Faculty Development）活動

（1）FD研究会（年１回）

FD研究会は、大阪市立大学における教育の向上を図るための学内外の教育改善・FDの取り組みの紹介や、本学の教育のあり方に関する全学的な情報共有や議論を深める場として設定されています。例年、100名前後が参加してきた大きな研究会です。2015（平成27）年度、第13回の全体のテーマは「学士課程の学修成果の検証結果と今後の評価方法の可能性」でした。

（2）教育改革シンポジウム（年1～２回）

教育改革シンポジウムは、大学をめぐる多様な課題について、大学内外の情勢を鑑みながら全学的に考えを深めることを目的に開かれています。2015（平成27）年度は、第23回全体テーマ：「高大接続の観点からの入試・教育改革について」講演題目：「京都大学におけるAO入試制度について」（講師：京都大学　楠見孝先生）でした。

（3）FDワークショップ・大学教育研究セミナー（年数回）

FDワークショップと大学教育研究セミナーは、ワークショップ形式またはラウンドテーブル形式等をとり、主に学内の参加者間で授業デザイン事例など教育実践事例や大学教育に関する研究活動の成果の紹介とそれらについての意見交換を行う場として設定されています。

研究成果の発信と広報

（1）大阪市立大学大学教育研究センター紀要『大学教育』

主として本学の教育に資する研究成果の発表の場として、学内はもとより全国から投稿を募り、年に１～２回発行する査読付き学術雑誌です。センターのFD活動・研究活動の報告の場でもあります。

（2）大学教育だより & Un roseau（アン ロゾ）

本学の学生・教員および学外の方々に、総合大学である大阪市立大学における様々な教育の取り組みと、学生の学びの様子や可能性を知っていただくための教育広報誌『大学教育だより』と、本学での学びの道しるべとしての全学共通教育総合教育科目ガイドブック『アン ロゾ』を、2006年度から合冊発行し広く学内外に配布しています。また、『新入生のための授業選び案内』も、別冊発行しています。

センターの研究活動

（1）カリキュラムの評価に関する研究

学士課程教育、大学院教育の評価を行うことは、本学の教育を持続的に充実させていく上で重要なことです。平成27年度が機関別認証評価の受審年にあたったということもあり、平成26年度には学士課程の学生、大学院生、学部卒業生、大学院修了生を対象にしたアンケート調査を実施しました。今年度はその結果を分析して報告書等にまとめるとともに、全学のFD事業や学内他部局のFD活動でも報告をしました。本学学生の学習状況や入学前の学習経験と入学後の学習成果の関連などが見えてきました。また今後の調査研究における注目点なども明らかになりつつあります。次年度以降も引き続き、調査結果の分析を掘り下げるとともに、今後も継続的な調査研究を展開していきます。

（2）教育実践・カリキュラムの開発と評価に関する研究

①初年次教育関連：大学入学前から学士課程教育への円滑な移行をめざして行われる初年次教育ですが、国内の大学入試の制度やあり方が変わりゆく方向にある中で、本学でもそのあり方を新たに検討しているところです。多様な学部学科を擁する大阪市立大学において、初年次教育の全学的な質保証をどのように図っていくのかという問題に取り組んでいます。

②副専攻プログラム関連：2015（平成27）年度より、大阪市立大学にはふたつの副専攻が発足しました。ひとつは、グローバル社会で生き抜く基礎力をはぐくむGlobal Communication副専攻、もうひとつは、地域に根差し、地域で活躍できる人をはぐくむCommunity Regeneration副専攻です。これらの副専攻は、本人に学習余力と能力と意欲があり、主専攻（自分の専門分野）と両立できるならば、どのような専門分野を専攻していても履修することが可能です。センターは、これまでに行ってきた教育評価研究と実践を足掛かりに、副専攻カリキュラムデザインとシステムデザイン、および、修了認定にかかわる評価方法等の策定を支えています。

③大学院共通教育関連：大学院の研究科を超えて履修可能な大学院共通科目を平成27年度から立ち上げました。センターは、その制度構築を担うとともに大学院生のキャリアデザイン系の新しい演習科目の開発と提供を行っています。

（3）本学の教育改善・FDに関する調査研究

本学では、FD（ファカルティ・ディベロップメント）を、本学の学生が真に学ぶ教育の高い質の維持と一層の向上のための、構成員全体（教員・職員・学生）の自律的で組織的な取組として捉えています。センターでは、全学の教育改善・FDを企画推進するとともに、近年急速に活発化している各学部等の教育改善・FDの取組への協力支援も行っています。また、本学教員の教育・FDの日常的活動状況や意識の調査・分析を定期的に行うとともに、集まった教育実践事例を教員相互で活用し合えるWEBデータベースも開発し公開しています。

（4）その他、学内の教育研究・開発ニーズに基づく研究

上記以外に、以下①～③のような、学内ニーズに基づく各種調査・研究活動も行っています。①入学者追跡調査：市大に入学した学生の皆さんが在学期間に学び、卒業していくプロセスをたどることで市大の教育の課題を浮かび上がらせ、選抜方法や教育の改善に結びつけるために実施しています。②将来、大学教員をめざす大学院生のための大学教育実習制度の構築と実施に協力したり、③大学院生とその卒業生であるポストドクターに対するキャリア開発支援のプロジェクトを推進したりもしています。

大学教育研究センター紹介

RDHE Osaka City University Center for Research & Development of Higher Education

大阪市立大学 大学教育研究センター

大阪市立大学 大学教育研究センターは、大学を取り巻く新しい環境の中で、社会の進路を見据えた大学教育のあり方を実現することを目指して研究と開発をすすめるために設立されました。
以下の運営体制（左図）のもと、3本の研究の柱を基本に据えつつ相互に強く関連をもつ各種プロジェクト（右図）に取り組んでいます。

大学教育研究センターの研究

大学教育研究センターの運営体制

所長 教育・学生担当副学長

大学教育研究センター
副所長（専任研究員）
専任研究員・兼任研究員

教学・FD部門	評価部門	調査・研究部門
全学FD 横断型教育	学修評価 大学評価	調査研究 教学IR

大阪市立大学大学教育研究センター規定第3条（事業）

(1)大学教育に関する**研究、調査、企画、提案、及び提言**に関すること
(2)大学教育に係る**点検、評価及び改善**に関すること
(3)各部局の**FD活動等**の状況把握及び全学的な活動の各部局への周知等に関すること
(4)**その他**前条の目的を達するために必要な事項

高等教育の制度やその役割についての研究

（1）学士課程教育システムのあり方
（2）学生相談・学習相談システムのあり方
（3）社会における大学のあり方
（4）生涯学習社会における大学のあり方

全学的FD活動 各種研究プロジェクト

カリキュラム・教育方法の開発に関する研究

（1）学士課程のカリキュラムおよび教育方法の開発
（2）初年次教育カリキュラムのあり方
（3）授業改善支援システムのあり方

大学教育の評価および教員評価のあり方に関する研究

（1）大学教育評価のあり方
（2）大学教員評価のあり方
（3）FD活動のあり方

大学教育研究センタースタッフの紹介（平成28（2016）年3月現在）

■所長

井上 徹
副学長

■専任研究員

大久保 敦
副所長 大学教育研究センター教授
研究分野：高校大学の接続／科学教育／古植物学

飯吉 弘子
大学教育研究センター教授
研究分野：社会における大学のあり方に関する研究／教育学／大学教育史

西垣 順子
大学教育研究センター准教授
研究分野：大学教育の評価に関する研究／教育心理学

渡邊 席子
大学教育研究センター准教授
研究分野：教育支援システムの開発／キャリア教育／社会心理学

平 知宏
大学教育研究センター特任講師
COC教務コーディネーター
研究分野：データに基づく教育改善／認知科学

■兼任研究員

向山 敦夫
経営学研究科教授

辻 賢二
経済学研究科教授

中村 健吾
経済学研究科教授

木下 秀雄
法学研究科教授

山崎 雅人
文学研究科教授

井狩 幸男
文学研究科教授

福島 祥行
文学研究科教授

長谷川 健一
文学研究科講師

高橋 太
理学研究科教授

荻尾 彰一
理学研究科教授

兼子 佳久
工学研究科教授

鳥生 隆
工学研究科教授

広常 真治
医学研究科教授

村川 由加理
看護学研究科講師

市川 直樹
生活科学研究科准教授

永村 一雄
生活科学研究科教授

大西 克実
創造都市研究科准教授

■事務局

今村 剛
学務企画課長

酒井 伸満
学務企画課長代理

葭本 真弓
学務企画課員

編集後記

大阪市大の教育広報誌『大学教育だより』と全学共通教育総合教育科目ガイドブック『アン ロゾ』の合冊発行、そして別冊の『新入生のための授業選び案内』を今年も発行することができました。新入生を初めとする学生の皆さんには、是非ゆっくり目を通して、大学での学修を考えるきっかけに、していただければと思います。
『大学教育だより』「VOICE」欄では、理学部・研究科の学生・院生の皆さんと創造都市研究科の留学生院生の皆さんが、大学での学習経験や研究の様子を相互に紹介し合い、互いの理解を深めました。数学の学修・研究のあり方や、創造都市の留学生院生の皆さんの本国での学生生活や大学システム・現在の研究テーマと留学の選択・現在の学修・研究をどのように進めているかなどを知り合うことで、お互いの学びのあり方を考える良い機会ともなりました。各部局の教育の取組紹介欄では、文学部・工学部・生活科学部の3つの部局が多様な取組の紹介を、市大ニュース欄では、2015年度から始まった副専攻制の説明やEnglishカフェの紹介を掲載しています。総合大学で学べる良さを実感するためにも、他学部の記事や全学に開かれた新しい制度の記事も是非読んでみて下さい。
『アン ロゾ』は、教務担当部長で経済学研究科教授の橋本先生と、カウンセリングルーム室長で生活科学研究科教授の三船先生がそれぞれ、学生の皆さんに、大学での学びのあり方について語りかけて下さっています。是非こちらも読んでみて下さい。（飯吉）

編集委員：飯吉 弘子・高橋 太・大西 克実